# 寄り添う言葉

永田和宏 Nagata Kazuhiro
小池真理子 Koike Mariko
垣添忠生 Kakizoe Tadao
小池 光 Koike Hikaru
徳永 進 Tokunaga Susumu

インターナショナル新書 135

# はじめに

私は長く朝日新聞の歌壇（「朝日歌壇」）の選者を続けていますが、最近採った（選んだ）歌にこんな歌がありました。

どっちみちどちらかひとりがのこるけどどちらにしてもひとりはひとり

夏秋淳子　「朝日歌壇」二〇二三年一二月一〇日

この作者はすでに夫を亡くし、その寂しさのなかで夫亡き日々を歌に綴ってきました。ときには、「なぜ私を置いて、自分だけ先に逝ってしまったのよ」などと、心のうちで責めることもあったのでしょう。しかし、夫婦というものは、いずれにしてもどちらかが先に逝ってしまうもの。これだけは避けようのない人生時間の鉄則でもあります。逆に私が

先に逝ってしまっていたら、あの寂しがり屋の夫が、今の私と同じような寂しさを感じるほかはないのだろう、それなら私が残って、まだよかったのかも知れない、と思ったのかもしれません。「どちらにしてもひとりはひとり」には、深い諦めとともに、そんな不条理とも思える定めのなかで、なお亡き人を思い、残された自分の生を見つめ続ける作者の現在が映し出されているように思いました。

終わりなき時に入らむに束の間の後前ありや有りてかなしむ

土屋文明『青南後集』

一方で、こんな歌もあります。土屋文明は、六〇年以上連れ添った妻を九一歳のときに亡くしました。これまでの長い時間を共に過ごし、そして死後の果てのない時間を共に過ごすことになる妻。どちらが先か、そんな「束の間の後前」をなんで嘆くことがあろうかと思いつつ、しかし、その「束の間の後前」のあることがかなしいと詠うのです。まさに九〇歳を超えた男の、せつない恋の歌、相聞歌と言ってもいいのではないでしょうか。人を悼む歌、挽歌は、ときに相聞歌にも通じるのです。

伴侶を失う、亡くすということは、誰にも起こる必然ではありますが、それをどのように悲しみ、その悲しみにどう耐えるか、それはそれぞれの人によってまったく違うはずで、どうしたらいいかなどといった処方箋のない問題ではあります。

私は二〇一〇年に生涯の伴侶であった河野裕子（かわのゆうこ）を失いました。ひとり残された悲しみ、寂しさは誰にどう訴えようもないものでしたが、それは私ひとりのものではなく、誰もが通過せざるを得ないはずのものだと思ったとき、それを同じ経験をもっている人たちとことん語り合ってみたいと思ったのでした。本書では、私の敬愛する四人の方々をお招きし、伴侶が不治の病魔に襲われたとき、どう対処したのか、不幸にも伴侶を亡くしたあとどう自らを見つめてきたのか、そしてなにより、伴侶とはどういう存在なのか、それらをとことん本音で語りあうことになりました。もとより、そのような悲しみにどう対処したらいいかを説く啓蒙書でも、そんな境遇から逃れるための指南書でもありません。

私自身、それら自らの体験と現在とを、とことん本音で語りあうところから、もやもやと感じていたことにくっきりとした形が現れたり、これまで気づかなかった側面を新たに発見したりという経験をしました。読者の方々も、本書のなかで、きっとどこかに共感し、どこかに驚きをもった気づきと発見をされるはずだと考えております。

# 目次

はじめに　3

## 作家夫婦の寄り添い方　小池真理子　11

作家夫婦の病への向きあい方／病と創作活動／夫婦で作品を批評しあう
一人だと感じるとき／別の時間を生きるしかない／再発してから
個であることの心構え／再婚しないとは言えなかった／昭和の恋愛
書き言葉と話し言葉／『あの胸が岬のように遠かった』／夫の日記
残された者の時間／生物学と短歌のあいだで

## 夫として、科学者として　垣添忠生　81

がん患者の家族として／がんの再発／科学者として、夫として
残された時間の過ごし方／在宅医療を選んで／死を経験すること

グリーフケアの大切さ／悲しみの総量／書くことで乗り越える
「Dr.カキゾエ黄門」、全国を歩く／がんの局面に立ちあってきて
「がん」の捉え方を変えたい／がんと生きる人を支援する
遺族への支援をどうするか／検診を受けてほしい
亡くなった伴侶との対話

## それでも歌人は挽歌を詠む　小池光

試行錯誤の温泉卵／「あとで食べるから」
妻との共同作業／日常生活で病気の話をするか
俺でなかったらもう少し幸せだったんじゃないか
亡き妻の遺影に歌を供える／しんどいときに詠む歌
なぜ生きているときに言えなかったんだろう

## ありきたりでも寄り添う言葉　徳永進

なぜ医療の道に進んだのか／鶴見俊輔との出会い

治す医者、看取る医者／キュアがあることを忘れてはいけない
最後を過ごす場所／家は「解放区」になる／死が腑に落ちる
命の時間／悲しみにどう向きあうか／膜をめぐって

おわりに

# 作家夫婦の寄り添い方

小池真理子

## 小池真理子／作家

こいけ・まりこ　作家。一九五二年、東京都生まれ。成蹊大学文学部英米文学科卒業。「妻の女友達」で日本推理作家協会賞、『恋』（ハヤカワ文庫、新潮文庫）で直木賞、『欲望』（新潮文庫）で島清恋愛文学賞、『虹の彼方』（集英社文庫）で柴田錬三郎賞、『無花果の森』（新潮文庫）で芸術選奨文部科学大臣賞、『沈黙のひと』（文春文庫）で吉川英治文学賞を受賞。著書は他に、『死の島』（文春文庫）、『神よ憐れみたまえ』（新潮文庫）、『月夜の森の梟』（朝日新聞出版）、『アナベル・リイ』（角川書店）、『日暮れのあと』（文藝春秋）など多数。

**作家・藤田宜永と直木賞作家夫婦として共に歩んできた小池真理子は二〇二〇年に藤田をがんで亡くす。藤田との日々を綴ったエッセイ『月夜の森の梟』（朝日新聞出版）は多くの読者の心の支えとなり、大きな反響を呼んだ。**
**永田と小池は共に作家夫婦というだけでなく、妻が先に文学賞を受賞するなど、共通点が多いという。**
**同業の伴侶と過ごした日々、そして伴侶亡きあとの一人きりの日々について、胸の内を語りあった。**

**永田**　小池さんとは、ぜひ一度、ゆっくりとお話ししたいと思っていたんですよ。というのも、作家と歌人と分野はちょっと違いますが、同じ表現をする者同士が一緒に暮らしていたこと。その伴侶ががんになり、失うという経験をしていること。おまけに、どちらも妻が先に文学賞を受賞するなど、共通点がいろいろあるからです。

まずは『月夜の森の梟』（朝日新聞出版）についてお聞きしたいのですが、藤田宜永さんが亡くなって半年ほどで新聞連載が始まりましたね。どのような経緯で書くことになったのでしょうか。

**小池**　依頼があったのが亡くなってから三カ月目で、書き出したのが五カ月後だったと思います。

**永田**　そうでしたか。実は僕が『歌に私は泣くだらう』（新潮文庫）を書き始めたのも、河野（裕子）が亡くなってから五カ月が経った時期なんです。

**小池**　新潮社のＰＲ誌『波』に連載を始めたときですよね。

**永田**　はい、そうです。依頼を受けたときはどういうお気持ちでしたか。

**小池**　永田さんも同じだったかと思うのですが、長く共に暮らした仲のよい伴侶が、がんと診断された場合、亡くなる何年か前からいろいろな準備ができるんですよね。最悪のこともふくめて、あらゆるケースを想定していました。

　藤田の場合は末期の肺腺がんで余命半年、と宣告されていました。幸い治療方法は残されていたので、すがる思いでいたのですが、一方では、「覚悟しておかなくちゃいけない」という気持ちが常に心の奥底にあったんです。闘病中も「この人が死んだら自分はどうなるのだろうか」と、いろいろなシミュレーションを繰り返していました。「Ａと出ればＢ」と、自分なりに心の構えをエクササイズしてきたつもりでいたので、たぶん大丈夫だろうとたかを括っていたんです。

私は弱い人間ですが、これまでの人生、様々な災難に遭遇して、そのつどなんとか乗り越えてきた経験があるので「おそらく今回も乗り越えられる、そうにちがいない」と、無理やり思いこもうとしていたんですね。夫からも「お前なら大丈夫。保証する。おれが死んだら、みんなの前でおれの話をしながら大泣きするだろうけど、泣きながら饅頭をぱくぱく食ってるよ。一つじゃなくて、二つも三つも」なんて、からかわれていました。

でも、いざ死なれてみると、とんでもない。まったくだめでした。水のない古井戸の底へ転げ落ちていって、そこから這い上がれなくなるという感覚に襲われて。空を見ていても、深くて暗い井戸の底から見上げているだけ——という気持ちになってしまう。自分で自分をどうすることもできない、パニックというか精神的な混乱に陥って、仕事もできなくなってしまったんです。毎日、書くことを仕事に生きてきた人間が、気力を失って、何もしないで悲しみの中に沈んでいるわけで、そうなると、さらに井戸の底に深く落ちていくしかなくなる。新型コロナパンデミックが始まったばかりのときでしたから、誰とも会わず、ずっと独りでいたことも影響していたと思います。

**永田**　そこに編集者から、依頼の電話がかかってきたんですね。

**小池**　旧知の編集者が「書いてみませんか」と言ってくれました。そのとき「冗談じゃな

い、今はやめてほしい」とは思わなかったんですよ。そういう怒りも苛立ちもない状態だったので、「考えてみますから、保留にしておいてください」と返事したんです。編集者のほうもそんなに期待していなかったと思うんですね。

**永田**　藤田さんが亡くなってから、何も書いておられなかった？

**小池**　そのころ、月刊の文芸誌に長編連載をもっていたんですが、二回、休載させてもらいました。とても書けるような状態ではなかったんです。でも、あるとき、なんだか知らないうちに言葉がワーッとあふれてきて、とめどがなくなった。不思議ですね。歌人の方もそうかもしれませんが、作家は心の内側を常に無意識のうちに言語化しています。習性というか、本能なんでしょうね。気がつくと、自分の内部の心象風景を言葉に換える作業に没頭していました。難しい心理分析というものではありません。軽井沢の情景や季節のこと、自分が今、何を眺めて何を感じているか、何を思い出しているのか、思いつくままに、自分の中でしか使えない言葉でメモしていました。

**永田**　備忘録はつけたけれど、日記は書いておられないですよね。

**小池**　日記は書いていないです。感情的なことは一切書きませんでした。

**永田**　分析でもなく、感情を書いたのでもないとすると、どんなことを書いていたのでし

ょう。短歌には「挽歌（ばんか）」というジャンルがあって、かけがえのない人を亡くした、もっともつらいそんな時期でも、なぜか歌ができてしまうんですね。これは改めて考えると不思議なことでもあるのですが、小池さんも夫を亡くした現在進行形の自分の思いを、どこかに書き残しておきたかったんでしょうか。

**小池**　私が書いておきたかったのは「記憶」ですね。かつて夫と交わした会話であるとか、二人で行った場所、彼と過ごした時間――取るに足りないような刹那の記憶が、やたらとあふれてくるんです。他の人にはいちいち話す必要もないような、ささやかなことばかりですけれど、そうした記憶が束になって押し寄せてくると、どうしても書いておきたくなってしまって。そういう自分に気がついたときに「あ、やっぱり今しか書けないな」と思いました。

**永田**　その「今しか書けない」という感じは、すごくよくわかります。僕の場合は河野が亡くなって半年後くらいに、河野の闘病のために待ってもらっていたサイエンスの連載を「始めてもらえないか」と言われたんですが、そのときに、今書くならば河野のことしか書けない、と思いました。河野の場合は再発、転移するまでがたいへんだったんです。河野の精神がかなり不安定になって、家の中も滅茶苦茶（めちゃくちゃ）になった時期があって、なぜそこま

で荒れたのか、書くことで自分自身を救い出す必要があったのかもしれないと今なら思えます。『歌に私は泣くだらう』は自分を納得させたくて書き始めたので、一年あとだったら書けなかったと思います。

**小池**　救わなければと思ったのは、永田さん御自身のことですか？

**永田**　僕自身ですね。相当に痛手も受けたし、とにかく再発するまで河野の状態が酷かった。再発してからはむしろ平穏だったんですよ。そこが小池さんと少し違っていて、河野の場合、一番しんどかったのは、最初の手術をして平穏に過ごせるはずの八年間でした。

**小池**　八年もたいへんな時期が続いたんですか。

**永田**　そうなんです。まあ、ずっとたいへんだったわけではなくて、時々不安定な時期が訪れたという感じでした。再発、転移したあとは見ていて信じられないくらい平静に受け入れていたんですが、あとから振りかえると、あの不安定で私に攻撃的になっていた時期は、河野が自分の死をなんとか自分に納得させるためにストラグル（葛藤）していたんでしょうね。そのあたりのことを私自身もうまく理解できていなくて、「なぜあんなに荒れたんだろう」と、ずっと疑問でした。なんとか自分を納得させたいという切実な気持ちで、『歌に私は泣くだらう』を書き始めたんだろうと、今はなんとなく納得しています。だか

ら一年あとだったら、書けていないと思います。

**小池**　ああ、永田さんも「今しか書けない」と思ったんですね。

**永田**　はい。なので、小池さんの言われたことがよくわかります。

**小池**　そんな経緯で新聞にエッセイを連載することになったのですが、正直なところ、あれほどの反響があるとは思っていませんでした。嫌われるような内容だとは思わなかったんですが、掲載が土曜日の朝刊だったので、週末の朝、新聞を広げたとたん、夫と死別して涙にくれている作家の文章を読まされる読者は、さぞかしうんざりするだろう、と。でも蓋を開けてみると、「毎週、励まされています」「元気をもらっています」といった感想がたくさん届くようになりました。死別を経験した人もそうでない人も一様にそう書いてきたのが、とても意外で、信じられないほどでした。

**永田**　連載は計画なしに、その時々の思いを書いておられたんですか。私の場合は、何を書くかとか、どんな構成にするかとかを、まったく考える余裕もないままに書き始めたように思います。

**小池**　私も同じです。気持ちに余裕がなさすぎて、書くことの企みのようなものは何ひとつなかったです。小説や評論でもそうだと思いますが、書き出す前にはふつう、大なり小

なり、書き手の企みというものが必要になりますよね。テーマ、書き方、文体、方向性、いろいろな意味での企みです。作品の善し悪しは、その企みをどこまで完成形に近づけることができたか、ということに尽きる。でも、『月夜の森の梟』に関しては、一切、そういうことができる状態ではなかった。ぶつけるようにして書いたというか。同時に、人の反応もまったく気にしなかったですね。そういう意味では、余裕がなかったことで、逆に、正直な言葉の連なりを表現することができたのかな、と思っています。でも、そんなふうに、あふれてくる言葉を書き連ねていくみずみずしさが保てるのは一年が限度、とわかっていました。それ以上、続けたら、別のかたちのものになってしまいますので。

**永田**　だから『月夜の森の梟』がすごく人気が出たのに、一年ですっぱりおやめになったんですね。読んでいると途中から、自然に対する親和性が出てきて、人間のある種の救われ方になっているのかな、という気がしました。

**小池**　そうなのかもしれませんね。

**永田**　私の場合は、河野ががんと診断されたところからたどることで検証しようとだけ、思っていたんです。けれど書いているうちに、もう……。

**小池**　今、おっしゃっているのは新潮社の『波』に連載した「河野裕子と私　歌と闘病の

十年」のことですね？

**永田**　そうです。書き始めたのですが、こういう自分たちの生活をあからさまに書くといった連載はそれまでにやったことがなかったものだったので、三、四回目ぐらいでちょうど河野が精神的にかなり荒れ始めたころのことを書く段になって、心の準備が全然、できていなくてどうしても書けなくなってしまったんです。連載ですから、締め切りは毎月ある。どうしても書けなかったとき、私のサイエンスの師、市川康夫先生ががんになられて、最後に見舞いに行ったことを書いてしのいだこともありました。ところが、この章が意外に多くの方からの反響をもらって驚いたことがありました。

**小池**　あの連載は、一回が何枚くらいでした？

**永田**　二〇枚くらいですね。

**小池**　二〇枚はけっこう書きでがありますよね。

**永田**　そうですね。そんなに長い連載をしたこともなかったし、計画性もなかったので。

**小池**　しかも理系のテーマではなく、完全に文芸ですからね。

**永田**　たいへんでしたが、終わってみると、書いてよかったと思います。書かないと気がつかなかったことがたくさんありました。書きながら「あ、こういうことだったんだ」と、

自分でわかるんですよね。

**小池**　永田さんもたくさんの優れた短歌をお作りになっていて、ご自分の内面を言葉に変える作業が本能的にできるような生き方をなさってきたわけでしょう。

**永田**　そうですね、小池さんと同じように。

**小池**　はい。表現することができてしまうと、「人生を分かちあってきた伴侶と死に別れたあとの自分の気持ちは、他の誰にもわからない」と思いませんか？　私は高名な哲学者や宗教家、精神医学者の本を何冊も買い集めて読んだんですが、「違う、これも違う」って、それしか思いませんでした。私の感情は私にしかわからない。

**永田**　それはよくわかります。完全に、個別性の問題ですから。

**小池**　そうなんです。だからこそ、自分の言葉で書いたような気もしますね。

最初に『たとへば君』（永田和宏と河野裕子の共著、文春文庫）を読んだのは私の父をモデルにした小説『沈黙のひと』（文春文庫）を書いた直後でした。父は短歌を詠む人間で、『沈黙のひと』には父の短歌も載せたので、担当編集者が「小池さん、ぜひお読みください」と、送ってくれたのが『たとへば君』だったんです。

夫ががんになって、とても苦しくなったときに、何年かぶりに本棚から取り出したのも

『たとへば君』でした。がん闘病をなさっていた裕子さんが荒れておられたときのことを書いていらっしゃるのが、強く印象に残っていたからです。なので今日の対談は、すごく不思議な御縁だと思って。

**永田**　御縁というと、『沈黙のひと』に登場する羽場百合子（はばゆりこ）さん、朝日歌壇で彼女の短歌を採ったことがあるんですよ。

**小池**　ええっ！　そうだったんですか。ますます縁が深いですね。羽場さんは朝日歌壇の常連さんでした。かつて父の短歌も朝日歌壇で何度か入選していて、父はそのことを自慢していたものです。

**永田**　僕は羽場さんが出すのをやめる少し前から選者をやっていて、最後のころに二、三首採っているんです。

**小池**　そうでしたか、びっくりしました。そんなつながりもあったんですね。『沈黙のひと』の中に書いた、父に関する描写は実際にあったことばかりなんです。羽場さんと父は歌友でした。手紙のやりとりをしていたので、父が亡くなったあと、羽場さんのご自宅に伺って、私が知らなかったようないろいろな話も聞きました。

寄り添う言葉
永田和宏/小池真理子/垣添忠生/小池光/徳永進

発　行：集英社インターナショナル（発売：集英社）
定　価：979 円 (10％税込)
発売日：2024 年 2 月 7 日
ＩＳＢＮ：978-4-7976-8135-2

ネット書店でのご予約･ご注文は こちらからどうぞ！